
6. 実験都市「多摩」は住みよい街？バリアフリーの見地から

多摩サロン大学
(東京都多摩市)

I. 活動の拝啓と目的

『実験都市“タマ”は住みよい街か？バリアフリーの見地から』

と題した多摩サロン大学のバリア探検隊の活動目的は、これから高齢者として交通弱者に連なるものと思われる私どもの将来と、この多摩の地で永住していくことを考え、まずこの街のバリアの状況を把握し、それをビジュアルな情報として交通弱者の手元に届け、そしてそれを基にこれからのバリアフリーな街づくりへ向けての足がかりを掴むことにある。

多摩ニュータウンは事業開始から既に30年が経過し、人口は18万人に達しようとしている。しかし当初の共同住宅中心の住宅の供給を目的とした事業の方針により、結果としてもたらされたのは、人口構成が団魂の世代に特化した特異なパターンを形成した。子供たちの巣立ちによってこれからは、更に超高速度で高齢化が進むと予測されている。

II. 活動の内容

活動の具体的な中身は

- ①街の中のインフラ部分（車道脇の歩道、歩行者専用路などの歩行者空間）に存在するバリアを抽出しマップ情報としてまとめること。
 - ②マップ情報をOA機器を使って交通弱者の手元にビジュアルな形で伝えること。
- の二つである。

①の作業は主にフィールドワークである。私どもはとりあえず緊急性の高い駅（多摩市内には私鉄の4駅がある）周辺からとりかかることとした。

作業に当たってはなるべく「車椅子」の視点でバリアの発見をするべく、障害者のグループの協力を求めた。また、その他の住宅地域については、それぞれの地区の高齢者団体との連携で、「地元情報は地元から得ること」により、精度を高めるよう務めた。

9年度では、駅周辺については永山、多摩センターで、住宅地域については、聖ヶ丘地区をケーススタディとしてのフィールドワークを実施した。

各地区の高齢者団体との共同作業の第一歩としては、先ずそれぞれの地域・地区の身の回りの環境で、日常生活の“ひやっと”した場所と原因を抽出してもらい、それを「ひやっと地図」上にプロットしてもらった。このデータを基に現地の検証を実施。バリアの存在を確認し、バリアマップとしてまとめる作業を行った。

②については、協力団体としての多摩市の福祉マップを作る会およびトムハウス（多摩市



バリア調査

落合のコミュニティセンター)福祉部の支援により、マップ情報のOAへの取り込みとホームページの作成までのシステム構築を修得し、10年度よりの情報発信開始の準備にとりかかっている。

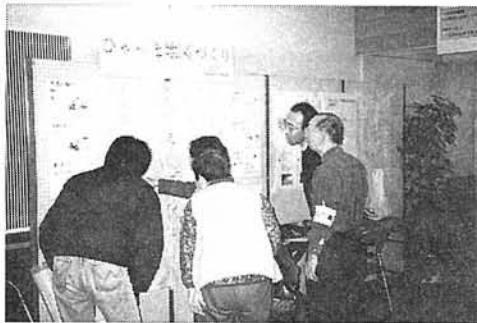
III. 活動の効果および今後の課題

バリアマップづくりの活動を通じて改めて地域団体とのネットワークづくりの大切さと、意義を認識した。今後も更なるネットワークの拡大をめざして活動の範囲をひろげていきたい。

(財)ハウジングアンドコミュニティ財団の助成のおかげで、とりあえずバリアマップづくりを始動することにこぎつけた9年度であったが、今後の多摩市全域のバリアマップ作りという大きな目標に向けて、いかにこの活動を継続していくことができるかが私どもの課題として問われていると考える。

また、バリアフリーマップの街づくりに向けてバリア情報の把握という仕事は、その第一歩を踏み出したに過ぎない。バリアの解消にはインフラストラクチャーの改修、改善というハードの障害を乗り越えなくてはならない。それには、バリア解消へ向けての市民のコンセンサスの醸成が必要となる。

バリアの存在についての認識をまず市民共有のものとする為に、私ども“バリア探検隊”の活動の成果としての“バリアマップ”が、受け手としての交通弱者の手に届き、更に全市民の共有する情報となり得るところまで継続されて始めてバリアフリーな街作りがスタートすることになるだろう。



ひやっと地図づくり



バリアマップ情報のOA入力作業